「学力の伸び」の状況（平成 27～29 年度）

埼玉県学力･学習状況調査の実施も、今回で３回目となりました。今年度は、昨年度に続き、２度目の「学力の伸び」の状況が分かりました。これらの結果から見られる成果と課題をお伝えします。

分析と対応策

＜分析＞

○　昨年度と比較すると、「学力の伸び」が見られた児童生徒の割合が、国語科（小４～中３）、算数・数学科（小４～中３）、英語（中２～中３）の 11 の学年間のうち、８つの学年間で増加している。

○　昨年度と比較し、「学力の伸び」が見られた児童生徒の割合の学年間の差は縮小している。

○　昨年度、中学校１年生から中学校２年生にかけての「学力の伸び」が見られた生徒の割合が最も少なくなることから、学力面での「中１ギャップ」を指摘した。

今年度、改善は見られたものの、依然として、その割合が最も少ないことに変わりはない。

○　小学校４年生から小学校５年生にかけての「学力の伸び」が見られた児童の割合は、他の学年と比べて最も多いことに変わりはないが、昨年度と比較して減少している。

＜対応策＞

・　本調査の結果等を確認し、「学力を伸ばした児童生徒の割合が大きい」、「学力の伸び率が高い」学年や学級を担当している教員から聞き取りを行うなど、効果的な取組を全校で共有し実践する。

・　県学力・学習状況調査のデータ活用事業での分析結果を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業の工夫・改善を図る。

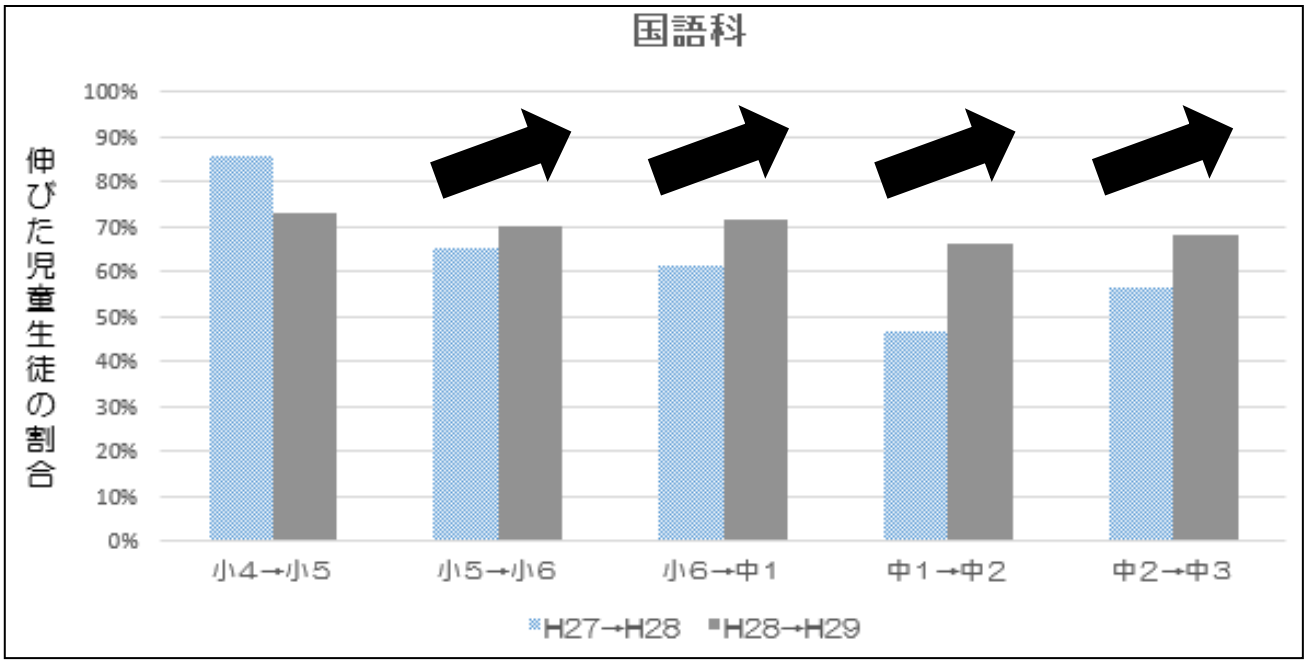
・　中学校区内の小・中学校で合同研修会や授業研究会を実施し、指導法の違い等について共通理解を図るなど、学習面での小中連携を一層進める。

国語科

＜国語科における県全体の状況＞

○　「学力の伸び」が見られた児童生徒の割合が、４つの学年で改善した。中でも、「小６→中１」「中１→中２」「中２→中３」の３つの学年間で 10%以上増加した。

○　「学力の伸び」が見られた児童生徒の割合が、最も多いのが「小４→小５」であること、最も少ないのが「中１→中２」であることは、昨年度と変わりはない。しかし、その差は 7.1%であり、昨年度の 38.8%から大きく縮小している。



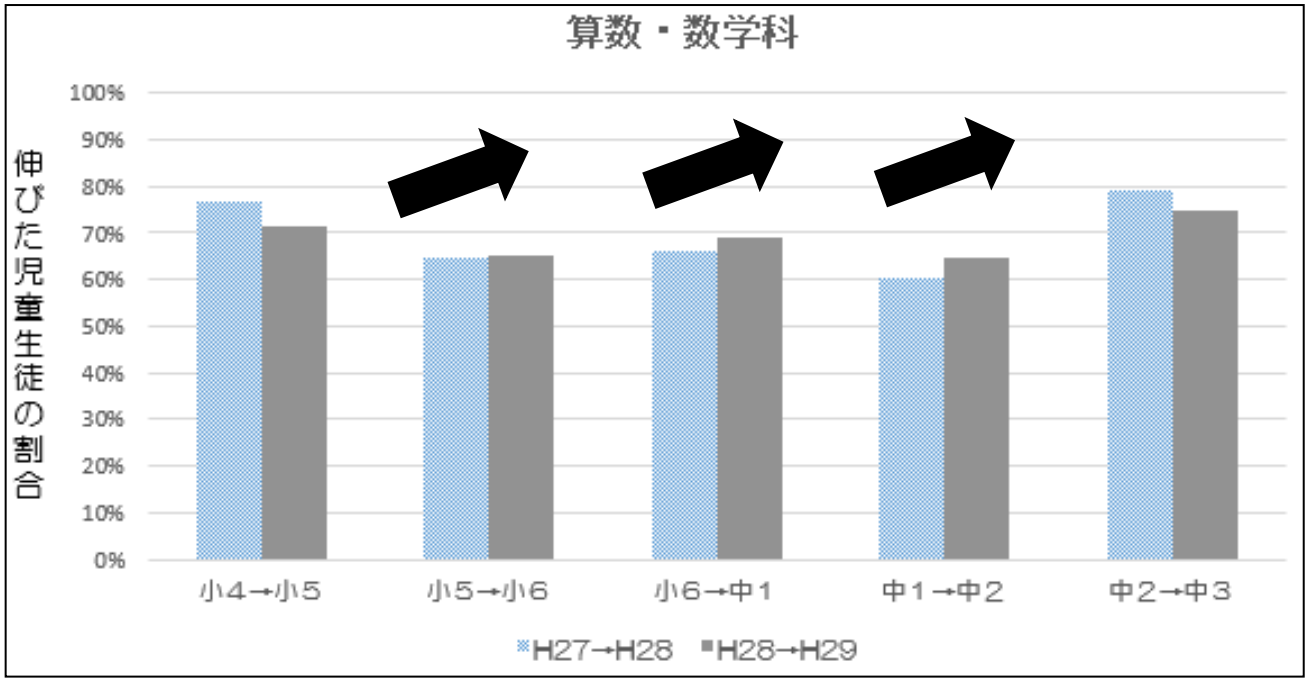
	小４→小５	小５→小６	小６→中１	中１→中２	中２→中３
H27→H28	85.4%	65.1%	61.2%	46.6%	56.6%
H28→H29	73.1%	70.2%	71.7%	66.0%	68.3%

算数・数学科

＜算数・数学科における県全体の状況＞

○　「学力の伸び」が見られた児童生徒の割合が、「小６→中１」で 3.1%、「中１→中２」で 4.6%増加した。一方で、「小４→小５」で 5.4%、「中２→中３」で 4.3%減少している。全体としては、ほぼ横ばいである。

○　「学力の伸び」が見られた児童生徒の割合が、最も多いのが「中２→中３」であること、最も少ないのが「中１→中２」であることは、昨年度と変わりはない。
　しかし、その差は 9.9%であり、昨年度の 18.8%より縮小している。

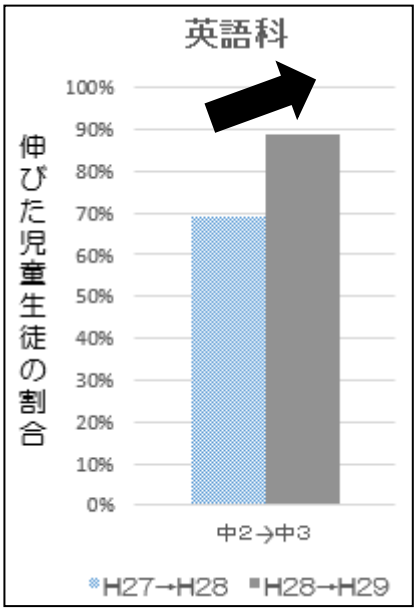


	小４→小５	小５→小６	小６→中１	中１→中２	中２→中３
H27→H28	76.8%	64.9%	66.1%	60.2%	79.0%
H28→H29	71.4%	65.2%	69.2%	64.8%	74.7%

英語科

＜英語科における県全体の状況＞

○　「学力の伸び」が見られた児童生徒の割合が、「中２→中３」で、19.7%増加している。



	中２→中３
H27→H28	69.1%
H28→H29	88.8%

※数値の見方

上記のグラフ及びデータは、昨年度から「学力の伸び」が見られた児童生徒数の受検者数全体に対する割合です。教科ごとに「学力の伸び」が見られた（各学校に送付した帳票 01「教科に関する調査　採点結果」にある「昨年度からの学力の伸び」の値が１以上であった）児童生徒数を、受検者数で割った値です。いわゆる「伸び率」（全ての児童または生徒の「学力の伸び」の値を足し合わせて、受検者数で割った値）ではないことに注意してください。